

Le Lys Rougeに於ける 懐疑性の構造

小 住 毅 志

I

Jean Levaillantは、Le Lys Rougeを次のように定義付けている。

＜On verra plus loin le contenu, la valeur et la signification des émotions artistiques d'Anatole France , en particulier dans Le Lys Rouge.＞^①

これを、更に、細かく見れば、Bancquartの指摘するように、次の如くなろう。

＜France éprouve le besoin de conserver dans Le Lys Rouge des personnages—Paul Vence et Choulette—qui considèrent non plus la réalité, mais les principes qui la dirigent.＞^②

唯、Bancquartは、Le Lys Rougeをantichrétienな作品として把握しているが、

＜les principes qui la dirigent＞に注目し、殊に、Anatole Franceの作品の懐疑性の起因と構造に焦点を当てて論究する。

II

＜Enfant, la vie lui faisait envie et peur. Et maintenant elle savait que vivre ne vaut pas tant d'inquiétude ni d'espérance, que c'est une chose très ordinaire.＞^③

人生に対して、種々の情感が生じ、種々の対処心理が働くが、人生自体は、＜une chose très ordinaire＞なものである。

＜une chose très ordinaire＞なものに、何故、懐疑の心が生じるかというと、次の点が契機となっている。

＜Il est misérable. Il se tourmente ,il vent, il souffre; car vouloir , c'est souffrir.＞^④

人間が、人生に於て、何かを意図し、期待するから、壁に突き当たり、苦悩するのである。この人生に対する苦悩から、懐疑の念が生じてくる。

＜vouloir, c'est souffrir＞という原理は、弱々しいものではない。

苦しみ、懐疑し乍らも、この作品に於ては、人間は絶対であるからである。

＜L'homme est le dñeu qui veut sa créature tout entière.＞^⑤

亦、苦悩が懷疑への目を増々広めていく。

〈La douleur, il n'y a rien de tel pour élargir l'esprit.〉^⑥

しかし、苦悩し、懷疑すればする程、人生は、彼にとって、すばらしいものには思えなかった。

〈La vie est une sale chose, quand j'y pense.〉^⑦

ともかく、〈vouloir, c'est souffrir〉の原理に則って見えてきたものは、〈l'immensité effrayante de la vie et des choses〉^⑧であった。

従って、彼の懷疑性は、一面だけの袋小路に閉じ込められた性質のものではなく、広く視野を広めた上での懷疑性である。

能動的に、〈vouloir〉すればする程、〈l'immensité〉の壁に突き当たり、〈souffrir〉の原因になるのである。

そして、この〈l'immensité〉の中に、人生に於ける諸々の懷疑が込められている。

当然、ここには、intelligenceとsensibilitéの二要素が働くが、〈des ombres vagues〉のイメージに彩られ、反面での、人生への失望にも結び付いている。

〈La vie est une trahison suivie.〉^⑨

〈, tous les livres sont ennuyeux. Mais les hommes sont plus ennuyeux que les livres.〉^⑩

先ず、彼の懷疑性は、無常観に支えられた無常的懷疑性と名付けられる性質のものである。

何故なら、〈l'immensité effrayante de la vie et des choses〉に出会った時、真先に認識されたのは、〈Les hommes, les choses, rien n'est sûr.〉^⑪であったからである。

〈l'immensité〉を前にして、諸々の懷疑が生じてくるけれども、認識対象に〈sûr〉なものが無いからである。

しかし、徒らに、〈sûr〉なものが無いからと言って無常のたゆたうままに流されたり、諦観の囚となって尻込みしたりしてはいない。

前述した如く、人間は、飽くまで、〈le dieu qui veut sa créature tout entière〉であるからである。

ここから、能動的な無常的懷疑性が始まり、積極的に、人生や事象に懷疑の念を深めて行くことになる。

彼の懷疑性は、〈vouloir〉する人間が、〈sa créature tout entière〉を探究する際に、能動的に作用し、介在し、必要化されるものである。

懷疑し、〈souffrir〉し、積極的に、建設的に、〈sa créature tout entière〉に接近しようとする性質のものである。

しかも、彼の無常性と懐疑性は、深い所で相関し合っており、懐疑が、本質的次元に於て、根底から成されている。

＜Qu'on sache ou qu'on ne sache pas, on parle. Tout ne se sait pas, mais tout se dit.＞

⑫

人間の認識能力の空しさ、限界性から出発しているのである。

一般的に認知されているものでも、その根底では、人間の認識行為の限界があり、＜Tout me se sait pas＞なのであり、無常性に結び付いている。

彼に於ける懐疑性の起因は、次の如く分類される。

①本能や人間存在の根底にあるものの力の作用

＜La vérité, c'était aussi qu'un instinct sourd et puissant l'avait poussée et qu'elle avait obéi aux forces obscures de son être.＞^⑬

人間存在主義の観点に立った場合、＜vérité＞も底が浅く、人間存在の深い力に揺り動かされ、そこから、懐疑の根が生じるのである。誠実に、＜forces obscures de son être＞を見つめれば、所謂、＜verité＞と称せられるものにも、懐疑の目を向けざるを得ない。

②認識の際の心の隙間と無の意識とその作用

＜, et ils sentaient dans leur âme un vide très doux.＞^⑭

＜La tristesse, des églises, la nuit, m'émeut; j'y sens la grandeur du néant.＞^⑮

厳しい認識の営みを続けても、心の何処かの片隅に、＜vide＞が生じ、空しさを覚え、それを突きつめて行くと、＜néant＞の意識が核となっている。＜néant＞を前にしては、人間の営み、認識の営みも空しく、これが、懐疑の根、起因となっている。

③人間の本質的孤独性、人間の魂の本質的な対他不可入性

＜Quoi qu'on fasse, on est toujours seul au monde.＞^⑯

＜Il se sent seul quand il pense, seul quand il écrit.＞^⑰

＜Il reconnaît que les âmes sont impénétrables aux âmes, et il en souffrir.＞^⑱

認識する場合に、観念や概念や一部の知覚は共通の広場で処理されるとしても、個々の思考の営み、認識の営みは本質的孤独性を有し、誰も他者の魂の中に分け入ることは本質的に不可能であり、他者の思考内容、認識内容の総てを知悉できない所から、懐疑の根が生じてくる。

Anatole Franceの思考、懐疑は、固定的なものではない。

与件が固定化していて、それに、一定の思考操作を加えておけば良いという性質のものではない。

思考する認識主体の中に懐疑の内部要因があると同時に、認識の与件も可変性を有する

相対的流動性を有している。

＜Bonnes ou mauvaises, les choses sont ce qu'elles doivent être.

Oui, ajouta-t-il les choses sont ce qu'elles doivent être. Mais elles changent sans cesse.>⑩

作品Le Lys Rougeに於ける彼Anatole Franceの懷疑の所産は、次の如く、分類できよう。

①懷疑の知的復権

＜Il n'est pas assez intelligent pour douter.>⑪

懷疑は、知的作業であり、懷疑しないで物事を鵜呑みすることは、たやすいことを逆説的に指摘している。

②sensuelなものの復権

＜; il n'est pas humain parce qu'il n'est pas sensuel.>⑫

如何に、論理だけをめぐらし、理窟だけの上で愛他主義を説いても、真に、人間と人間との間に官能的交流が無ければ、意味が無い。

唯、人間と人間との間の＜sensuel＞な交流のかい＜charité froide＞も困りものであるが、＜intelligence＞の面も欠いた＜sensuel＞なものの危険性も明確に指摘している。

＜Mais l'amour sensuel est fait de haine, d'égoïsme et de colère autant que d'amour>⑬

③絶対的霊肉分離二元論に対する反省

＜Et c'est autre chose encore qu'on ne peut dire, c'est l'âme de son corps.>⑭

＜; il est plein de sens et d'images; il est violent et mystérieux; il s'attache à la chair et à l'âme de la chair. Le reste n'est qu'illusion et mensonge.>⑮

＜âme＞と＜chair＞を各々独立させて論じることが、或る意味では、たやすいことである。＜âme＞の世界、＜chair＞の世界を、二元論的に展開することも、或る意味に於ては、たやすいことである。この問題は、作品中の例としての＜la fleur de sa chair＞や＜un amour sensuel＞の場合に限られるのではなく、＜chair＞だけの強調でもない。作者は、＜la chair＞と＜l'âme de la chair＞の二面を指摘しているのであって、両者の同根性を強調しているのである。

従って、Anatole Franceにあっては、一般的な、所謂、＜l'âme spirituel＞とでも言うべきものの他に、明確に、＜l'âme de la chair＞の存在を認め、これを復権させている。

④時間の連綿的相関性の指摘

《Monsieur Decharte, pour que la vie soit grande et pleine, il faut y mettre le passé et l'avenir. …… Et nous participerons ainsi de ce qui fut, de ce qui est et de ce qui sera.》^②

《—Le passé, c'est la seule réalité humaine.

Tout ce qui est est passé.》^③

《C'est le passé, l'obscur passé qui détermine nos passions.

Nous étions déjà si vieux quand nous sommes nés!》^④

私達の認識は、現在だけのものではない。人間の認識の営みは、本質的に、過去、現在、未来の相関性、連綿性の輪の中にあって、行われるものである。殊に、現在の認識と言えるものも、過去からの連綿性、過去の所産（認識上の）に負う所が大きく、積み上げの、予定決定的な面があることを指摘している。

⑤人間の認識の本質的主観性と自閉性の指摘

《—Oh! oui, les gens ne voient que leur idée; ils ne suivent que leur idée. Ils vont, aveugles, sourds. On ne peut pas les arrêter.》^⑤

《—Toute idée fausse est dangereuse. On croit que les rêveurs ne font point de mal, on se trompe: ils en font beaucoup.》^⑥

各人が各々の認識方法、各々の体系の中に自閉してしまう点を指摘している。観念や概念や論理、等の共通の広場はあっても、しばしば、認識が誤まれる由縁である。各人が各人の認識世界を展開することが結構なこととしても、この本質的自閉性、偏向性というものにも留意しておかないと、しばしば、誤まれることになる。

Anatole Franceの懷疑は、更に、人間存在に於ける認識の営みそのものにも向けられ、次のことが並置されている。

《Pourtant j'existe, et une idée, ce n'est rien.》^⑦

《On est heureux ou misérable d'une idée; on vit, on meurt d'une idée.》^⑧

人間の《存在》そのものから見れば、《idée》は取るに足らないものであるが、《idée》自体は、人間の生死、人生を支配し得る重大な要因である。

懷疑の営みの結果、彼が洞察した、人間存在への、ある意味ではシニカルな、ある意味では優しい、結論は、次の如くであった。

《Nous devons pourtant croire à quelque chose. S'il n'y avait pas de Dieu, si notre âme n'était pas immortelle, ce serait trop triste.》^⑨ (了)

〔註〕

①Jean Levaillant : Essai sur l'évolution intellectuelle d'Anatole France (Armand Colin, 1965) P

- ②Marie-Claire Bancquart : Anatole France polémiste (A.Cr. Nizet, 1962) P 292
- ③Anatole France : Œuvres complètes illustrées de Anatole France, Tome IX (Calmann-Lévy 1948) P 22
- ④Ibid. P 265
- ⑤Ibid. P 262
- ⑥Ibid. P 347
- ⑦Ibid. P 13
- ⑧Ibid. P 388
- ⑨Ibid. P 10
- ⑩Ibid. P 11
- ⑪Ibid. P 110
- ⑫Ibid. P 22
- ⑬Ibid. P 27
- ⑭Ibid. P 29
- ⑮Ibid. P 37
- ⑯Ibid. P 84
- ⑰Ibid. P 84
- ⑱Ibid. P 84
- ⑲Ibid. P 47
- ⑳Ibid. P 58
- ㉑Ibid. P 58
- ㉒Ibid. P 216
- ㉓Ibid. P 304
- ㉔Ibid. P 344
- ㉕Ibid. P 144
- ㉖Ibid. P 223
- ㉗Ibid. P 262
- ㉘Ibid. P 313
- ㉙Ibid. P 44
- ㉚Ibid. P 260
- ㉛Ibid., P 260
- ㉜Ibid., P 37

(九州電機短期大学講師)